

研究発表もうしこみフォーム（仲介者：松川節）

氏名：U. エルデネバト<sup>1</sup>, Ch. アマルトゥブシン<sup>2</sup>, B. バトダライ<sup>3</sup>

氏名のローマ字表記：U. Erdenebat, Ch. Amartuvshin, B. Batdalai

所属：1) モンゴル国立大学科学部人類学・考古学科長・教授 2) モンゴル国立大学科学部人類学・考古学科・准教授 3) モンゴル科学アカデミー考古研究所研究員

専門分野：モンゴル考古学

発表のタイトル：モンゴルにおける仏教の後期発展期に属する「ドブジョー」という遺跡について

発表要旨（600字～800字程度）：

モンゴル国スフバートル県トゥブシンシレー郡デルゲルハーン山付近に規模・構造の点で互いに似通った、近い年代かと思われる6つの囲郭遺跡がある。しかしいずれもこれまで考古学的発掘はされていない。一方、2018年6月にモンゴル国立大学科学部人類学・考古学科はモンゴル科学アカデミー考古研究所と共同で、トゴート河西岸に位置する「ドブジョー1」という遺跡を初めて発掘調査し、出土年代を確定する研究を実行した。

我々は「ドブジョー1」の基台の北隅で10m×10mの範囲を発掘し、450cm×450cmの天然の平たい花崗岩を重ねた分厚い壁面を持ち、石材の隙間を泥土で埋めた小型建造物の遺址を見出した。発掘によって建造物の飾り、屋根瓦、鬼面や花紋の軒瓦、木造物、鉄釘、鮮やかな朱色・緑色に塗られた壁片、土器片、中国銭、青磁片が出土した。また、建造物の下部より彩色の仏像片、蓮華祭壇の一部が得られたことより、現地で「寺のドブジョー」（訳注：ドブジョーは盛土された台形状の構造）と呼ばれてきた本建造物は、仏教の祭祀遺址か寺院と関連することが明らかになった。

「ドブジョー1」の発掘によって出土した木材（白檀）破片からサンプルを取り（UGAMS-38775）、アメリカのジョージ・メイソン大学の放射線研究所に送り、C14年代測定を行ったところ、遺跡の絶対年代として、1497 (2.1%) 1506 calAD; 1512 (71.3%) 1601 calAD; 1616 (22.0%) 1646 calAD, すなわち後16～17世紀の年代に関わる結果を得た。これは、本建造物の石造の様式、泥土による装飾の状態、特にレンガの焼成状態と品質の点で、我々が予想した年代と一致する。換言すれば、アルタティーン・フンディーンにおけるトゴート河の「ドブジョー1」は、モンゴルに仏教が伝播した後期発展期の歴史に関連する遺跡なのである。この時代はトゥメドのアルタン・ハン（1507～1582）から始まり、彼はチベット・ゲルク派の大化身仏ソドノムジャムツを招聘し、その後「ダライ・ラマ」の称号を献上し、フフホトのシレート・ジョーなどを建立した。同じ時代にハルハのアバダイ・サイン・ハン（1534～1586）は第3世ダライ・ラマに謁見し、その後、北モンゴルの地にエルデネ・ゾー寺院を建立した。この時代からモンゴルの地に仏教、特にゲルク派が大いに弘通し、北・南モンゴルに寺院、集会所が多く建立され始めたうちの 하나가、モンゴルの東部辺境の地の「ドブジョー」のようである。